■肢体不自由のある子どもたち・病弱のある子どもたちへの実践事例

絵本の読み聞かせと言語活動の実践

東京都立光明学園
主任教諭　逵（つじ） 直美

はじめに

当学園は、肢体不自由教育部門と病弱教育部門の併設校です。目指す学校像より、児童・生徒一人ひとりの障害・ 疾病から生じるさまざまな困難に対する主体的な改善・克服や健康の回復・保持増進を図る指導を積極的に行うとともに、個々の能力・特性を最大限に伸ばし、自立と社会参加の実現を目指しています。一人ひとりの能力と特性に応じたキャリア形成を実現するために、各教科と自立活動の指導を行っています。

子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かにする読書活動は、将来の自立と社会参加に必要不可欠な力を育むため、欠くことのできないものだと考えています。この考えをふまえて、子どもたちが人生をより深く生きる力を身につけるために、積極的な読書活動を推進しています。

ここでは、病弱教育部門　高等部での家庭演習・家庭総合の授業における取り組みと、肢体不自由教育部門　訪問教育部門での読書活動の取り組みについてご紹介します。

各教育部門の概要

(1) 病弱教育部門

本校の病弱教育部門は、健康の回復を図りながら、前籍校復帰や進路を実現する力の獲得を目指しています。教育課程は、「準ずる教育課程」の１課程のみで学んでいます。小学校、中学校および高等学校の教育内容に準ずる教育課程を編成・実施しています。この他、そよ風分教室（病院内分教室）、病院内訪問教育があります。

(2) 肢体不自由教育部門

卒業後の自立と社会参加を目指しています。「自立活動を主とする教育課程」「知的障害を併せ有する児童・生徒の教育課程」「準ずる教育課程」の３つの教育課程を児童・生徒の実態に応じて編成しています。在宅訪問も実施しています。

病弱教育部門
―高等部・家庭総合「保育分野における絵本の読み聞かせの取り組み」

(1) 学習指導要領　家庭総合

①目標

生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、さまざまな人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成する。

②内容　子どもとの関わりと保育・福祉

次のような知識及び技能を身に付ける。

ア）乳幼児期の心身の発達と生活、子どもの遊びと文化、親の役割と保育、子育て支援について理解を深め、子どもの発達に応じて適切に関わるための技能を身に付けること。

イ）子どもを取り巻く社会環境の変化や課題及び子どもの福祉について理解を深めること。

(2) 読み聞かせのねらい

読み聞かせのねらいとして、以下の点があげられます。

①言語発達や読解力の向上

読み聞かせにより、言葉のリズムや言葉の違いを知り、新しい言葉を覚え、語彙力が増えることで文章の意味がわかり、読解力の向上につながる。擬音語・擬態語の言葉や言葉の繰り返しを楽しむことができる。

②想像力の向上

読み聞かせにより、今まで出会ったことのない世界を知ることができ、想像力が刺激され、創造的な思考が促される。絵の美しさやファンタジーを楽しむことができる。

③感情理解と共感する力の向上

読み聞かせにより、登場人物や出来事の感情や行動に触れ、豊かな心情や感性を育てることができる。

④コミュニケーション力の向上

読み手と聞き手のやり取りから一体感や信頼関係を育むことができる。

⑤集中力や見通しをもつ力の向上

お話の内容の起承転結により、見通しを持つ力を育むことができる。

⑥認知発達能力の向上

文字や数の学習や三項関係や因果関係の学びにつなげることができる。季節感の理解を促すことができる。

⑦感覚の機能の向上

見る・聞く・触れる感覚や触覚機能を促すことができる。

(3) 読み聞かせの大事な視点

①相手の年齢や実態に合わせて興味関心のある題材を選ぶ。

②本の内容やフレーズに合わせて感情を込め表現や声の使い方を変える。

③読み聞かせに集中できる環境を整

える。
④見やすい高さや角度に配慮する。
⑤余韻を楽しむ。

(4) 発達年齢と読み聞かせの内容(一例)

①0歳から1歳

短い言葉とリズムのある絵本・鮮やかな色使いとはっきりした絵本。

②2歳から3歳

自分で読めるめくりやすい素材・登場人物の表情がわかる本・日常生活など身近な出来事や自然界の内容の絵本。

③4歳から5歳

文章が長めで物語の展開があり、読み手とのやり取りができ、ページごとに展開があり興味関心を促せる絵本。

④6歳から7歳

テーマがある長編の絵本や文学作品の内容の絵本で、知識を学べる内容の絵本。

(5) 絵本の選び方

以下の内容で本を生徒が選出しています。
①ストーリー
②言葉の使い方
③挿絵
④色彩
⑤題材の登場人物
⑥内容

(6) 実践内容

①対象

【読み手】準ずる教育課程　高等部3年　2名
【聞き手】　肢体不自由教育部門小学部・中学部知的代替の学習グループで実施しました。近隣の障害者施設（3学期予定）での実施を予定しています。

②教育課程

家庭演習　及び　家庭総合　保育分野で実施しました。

③活動の流れ

家庭演習・家庭総合の保育分野から、子どもの育つ力を知る⇒身体の発達・心の発達・子どもと遊び・子どもとのふれあいの内容を学習する⇒絵本で子どもの発達の関係について学習する⇒マルチメディアDAISY図書や絵本の選択⇒読み聞かせの練習⇒実践⇒振り返りの流れで行っています。

(7) 実践後の成果

①読み手（高等部3年生）　大型絵本で実施。

・家庭科（保育分野）で子どもの発達と遊びの関係を知ることができました。
・読み聞かせでの大切な視点を理解し、練習をすることができ、見やすい位置や声の出しかたなどを工夫することができました。
・優しい笑顔で聞き手が見やすい位置を考えることができました。
・人前で発表したりすることが苦手であったが、読み聞かせを体験することで聞き手が「ありがとう」という言葉やお礼の拍手で成就感が得られ、自信にもつながりました。

②聞き手（中学部知的代替の課程１年～３年）
・読み手の話を集中して聞くことができました。
・オノマトペに興味を示し、笑い声や笑顔を見せることができました。
・読み手との一体感を感じることができました。

（8）実践後の課題

読み聞かせは一定の時間継続して行うことで効果があるので、双方の日程調整をする必要があり、計画的に実施するうえでの課題は残りました。
・マルチメディアDAISY図書を大型スクリーンで映して読み聞かせを予定していましたが、視覚教材としての活用に問題はないが、読み手・聞き手の関係性は育まれないので、今回は、大型絵本を活用しました。
・病弱教育部門と肢体不自由教育部門の障害特性を読み聞かせの活動の活動に生かし、実際の絵本を使ったり、マルチメディアDAISY図書を使ったりして、準ずる課程や知的代替の課程から自立活動を主とする課程へ読書活動の波及に期待しています。このことは、併置校の特色を生かした教育活動につながるものだと考えます。

肢体不自由教育部門　訪問教育部の取り組み

①対象

訪問学級中学部・高等部の7名で実施。

②授業

国語

③内容

「いーリーダー」というアプリケーションを使用し取り組みました。

④様子

生徒の反応を見たり、発語ができる生徒に適切な音量を聞いたりして読み聞かせを行うことができました。『注文の多い料理店』を読んだ生徒は、どんな料理が出るか期待をしながら聞くことができましたが、あまりに怖い展開に驚く場面がありました。

⑤成果

「いーリーダー」では文字だけではなく、本のイメージ画像も確認できるため、本の内容をイメージしやすいところが良かったです。

読んだ本の良いところや説明をするPOPを作成する活動では、個の読み聞かせとイメージ画像がとても参考になりました。

作成したPOPは学校内に展示して、通学生の児童・生徒や教員にも見てもらい、訪問教育部の生徒の学習に関心をもってもらうことができました。

参考文献：
『障害の重い子どもの授業づくり Part 7』
飯野順子・授業づくり研究会 I & M 編著
（ジアース教育新社）